24.03.29　現在

「集落の将来」を考えるサポートツール使い方マニュアル

ー「持続可能な地域づくり」に向けてー

令和6年（2024年）3月

Ver.0

目次

1．はじめに

（1）サポートツール開発の背景
（2）サポートツール開発の目的
（3）サポートツールとは

2．サポートツールの活用シーン

（1）サポートツールの目的
（2）サポートツール活用のための体制づくり
（3）サポートツール作成後の展開

3．サポートツール作成の流れ

〇サポートツール作成の流れ
・Step 0　きっかけ・体制整備
・Step 1　実施範囲の設定
・Step 2　事前情報の整理
・Step 3　実施手順の確認・合意
・Step 4　カルテ・マップづくり
・Step 5　情報の一元化
・Step 6　住民共有

1．はじめに

ー「集落の将来を考えるサポートツール」の趣旨ー

（1）サポートツール開発の背景

人口減少のさらなる進行により、近年、兵庫県内においては、**多自然地域を中心に小規模集落が拡大**しており、個々の集落においても担い手の枯渇が進み、**集落運営の維持・活性化に取り組むことがこれまで以上に困難な状況**となっています。

	平成20年度		令和４年度
県内小規模集落数	247 集落	× 3.7 倍	918※ 集落

※多自然地域3,121集落に占める割合 約29%

多自然地域	市街化区域等の市街地を除く自然豊かな地域
小規模集落	世帯数50戸以下かつ高齢化率40%以上の集落

（2）サポートツール開発の目的

支援ツールは、３ヵ年をかけて一連のツールを順次開発することとしていますが、初年度は、まず、地域住民の主体性向上を図ることを支援するツールを開発することとしました。

行政においても人員不足や厳しい財政状況により、これまでと変わらない支援を継続することが困難になることが見込まれます。

このため、令和５年度は、地域住民自らが地域の現状や将来像を適切に把握・共有し、**地域の課題を「ジブンゴト」として捉える意識を醸成することを支援する「集落の将来を考えるサポートツール」**を開発しました。

（2）サポートツール開発の目的

また、本ツールを活用することは、**支援者にとっても、関係部署や集落との連携を深める機会になることや、集落の現状や地域住民の思いを把握することで施策の展開につながることなどが期待**できます。

本ツールが、地域づくりに取り組まれる支援者の皆さまにとって、歩みを進めるための一助になれば幸いです。

（2）サポートツール開発の目的

[参考]令和５年度 - 令和７年度開発ツール（案）

令和５年度 集落の将来を考えるサポートツール

・集落の現在と将来像を見える化
・住民のワガゴト化

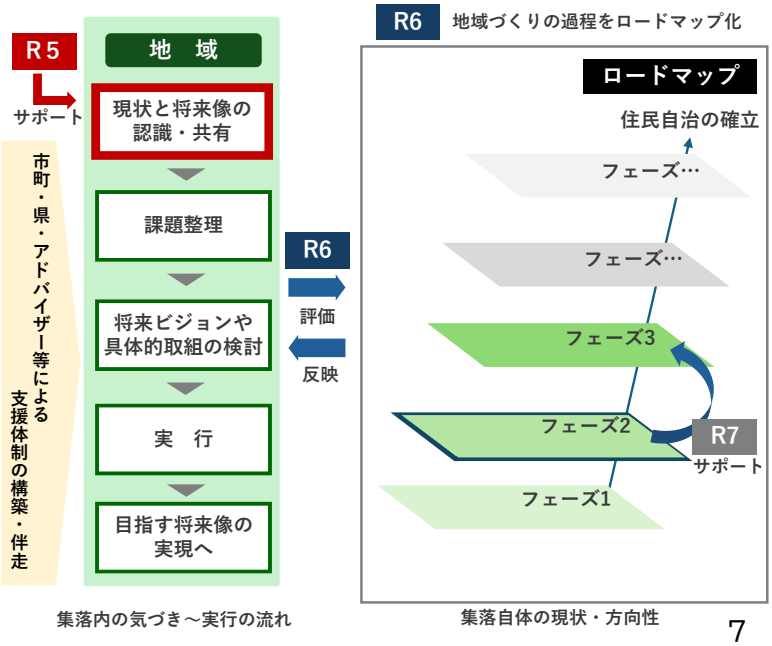
令和６年度 (仮)地域づくりのロードマップ/
(仮)集落評価ツール

・地域づくりの過程をロードマップ化
・集落の現状評価を行いロードマップ上の立ち位置（フェーズ）を見える化

令和７年度 (仮)フェーズに応じた集落サポートツール

・集落が目指す次のフェーズへの移行をサポート

（開発ツールイメージ）

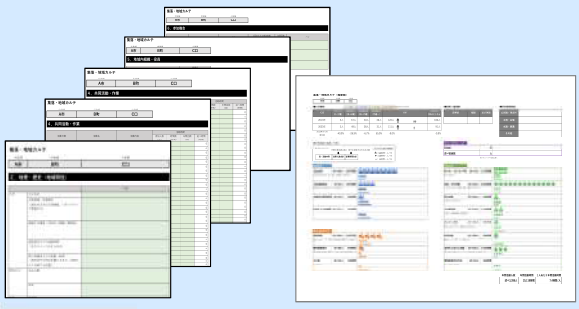


（3）サポートツールとは

サポートツールとは、**【A】集落カルテ、【B】集落マップの２種類**を言います。

【A】集落カルテ

集落の実情（人口、共同活動の様子など）を正確に把握し、住民のジブンゴト化を進める



【B】集落マップ

「現在と10年後の集落の姿」を可視化し、住民の方に危機感を持っていただく

POINT!

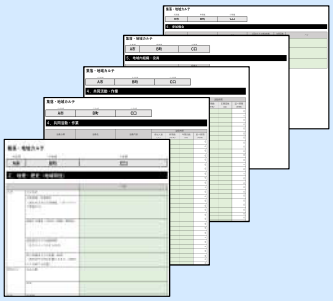
●サポートツールは「作成すること」が目的ではありません。
地域で集まり「地域の現状やこれから」を話し合うきっかけとして、活用するものです

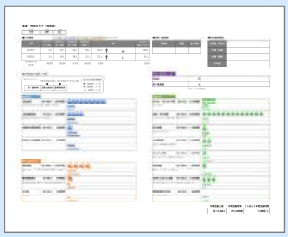
（3）サポートツールとは

【A】集落カルテで把握する項目の例

★把握する項目の詳細は「手引き」を参照

項目	内容の例
ひと・人口構造	人口、年代、世帯、関係人口…
地理・歴史（地域特性）	地区面積、寺社、災害、住宅・空き家、交通…
地域施設	住民の共同管理施設・場所（公民館など）…
共同活動・作業	寄り合いの場、文化活動、防災活動、公民館活動、支え合い活動、環境維持活動…
地域内組織・役員	組織名、隣保・組編成、役職…
参加機会	女性、若者、外部人材の参加…
組織連携	広域や周辺の組織との連携…
資金資産	自治会費・区費、固定資産・預金…





（3）サポートツールとは

【B】集落マップで把握する項目の例

★把握する項目の詳細は「手引き」を参照

①地図に書き込む情報

- □ 世帯とその人数・年齢
- □ 空き家
- □ 危険個所
- □ 隣保・組
- □ 農地の管理状況
- □ 交通　等
- □ 地域施設・公共施設
- □ 寺社仏閣

②話し合いの中で確認していく項目

ー地図をつくりつつ・眺めながら、以下の項目を話題にしながら、話し合う

- □ 現在の集落の役職・共同活動の内容など
- □ 将来について話し合う場・集落の行事・役職等の見直しや変更の有無・状況
- □ 集落で暮らしつ続けるために必要なこととそれらに対応し、集落で取り組んでいること
- □ 空き家や農地等の資産・土地利用の対応状況と意向
- □ その他、将来に向けて気になること・不安なこと・必要なこと

2．サポートツールの活用シーン

ー地域からの相談対応、地域活動の見直しや取組の支援に向けてー

（1）サポートツールの目的

【目的】

①「集落の現状」を見える化する（可視化する）
② 集落の方が「ジブンゴト」として集落のことを考え、
主体的に地域づくりを進める
ことが円滑に進められるように作成したもの（フォーマット）

【期待される効果】

●関係機関と情報共有を図りながら、集落との連携を深める
●「持続可能な地域づくり」の連携・協力体制を整備する
●集落の現状を把握し、施策に展開する

（1）サポートツールの目的

このサポートツールは、

●集落から相談や要望を受けたとき
●集落について、住民どうしでもっと理解したいとき
●支援者等が集落とコミュニケーションをとりたいとき
●地域づくりの施策検討をしたいとき

などの場面において活用できます。

集落マップの作成の様子（南あわじ市）

集落からの相談や要望（例）

- 隣の自治会との統合を考えたい
- 住民から「集落のこれからを考えたい」と言われているが、何をしたらいい？
- 共同活動を整理（棚卸し）したい
- 高齢化で草刈り活動がしんどい
- 集落の活性化計画を作りたい
- 集落の住民が集まるきっかけを作りたい
- 山の管理を何とかしたい

（2）サポートツール活用のための体制づくり

地域づくりの取組には、庁内のさまざまな部署、地域づくりに関係する団体や支援者などの連携・協力体制の構築が重要です。

サポートツールの作成にあたり、関係する方々と集落の情報を共有しながら進めることは、関係者どうしの横のつながりが強まり、体制構築につながります。

POINT!

●地域づくりに関係する団体や支援者の例：

社会福祉協議会、民生委員、集落支援員、地域おこし協力隊、
専門的な人材支援（兵庫県地域再生アドバイザー、中間支援組織）　など

●地域づくりで共有したい集落（地区）情報の例：

人口・世帯数（推移）、地理・歴史、住まい・空き家、共同施設、
共同活動、活性化活動、伝統・文化行事、農地・ため池・山林、
防災（過去の災害被害含む）、隣保・組編成、集落内の組織・役職　など

（3）サポートツール作成後の展開

サポートツール作成後は、

①情報を整理（一元化）して、関係部署や支援機関と共有する

②集落の検討テーマに合わせてフィードバックし、課題整理や将来に向けた話し合いにつなげていくことを想定します。

＊なお、具体的な展開方法や進め方は、令和6年度以降に検討します（「1.はじめに」を参照）。

地域での展開イメージ（例）

集落内の気づき～実行の流れ

きっかけ（相談や要望等） ▶ 現状と将来像の認識・共有 ▶ 課題整理 ▶ 将来ビジョンや具体的取組の検討 ▶ 実　行 ▶ 目指す将来像の実現へ

サポートツールを活用（集落カルテ、集落マップ）

課題の優先度を考える話し合い（10年後に向けて何をしていくかなど）

取組の例：隣保統合に向けて●●を検討、試行的に●●を実施

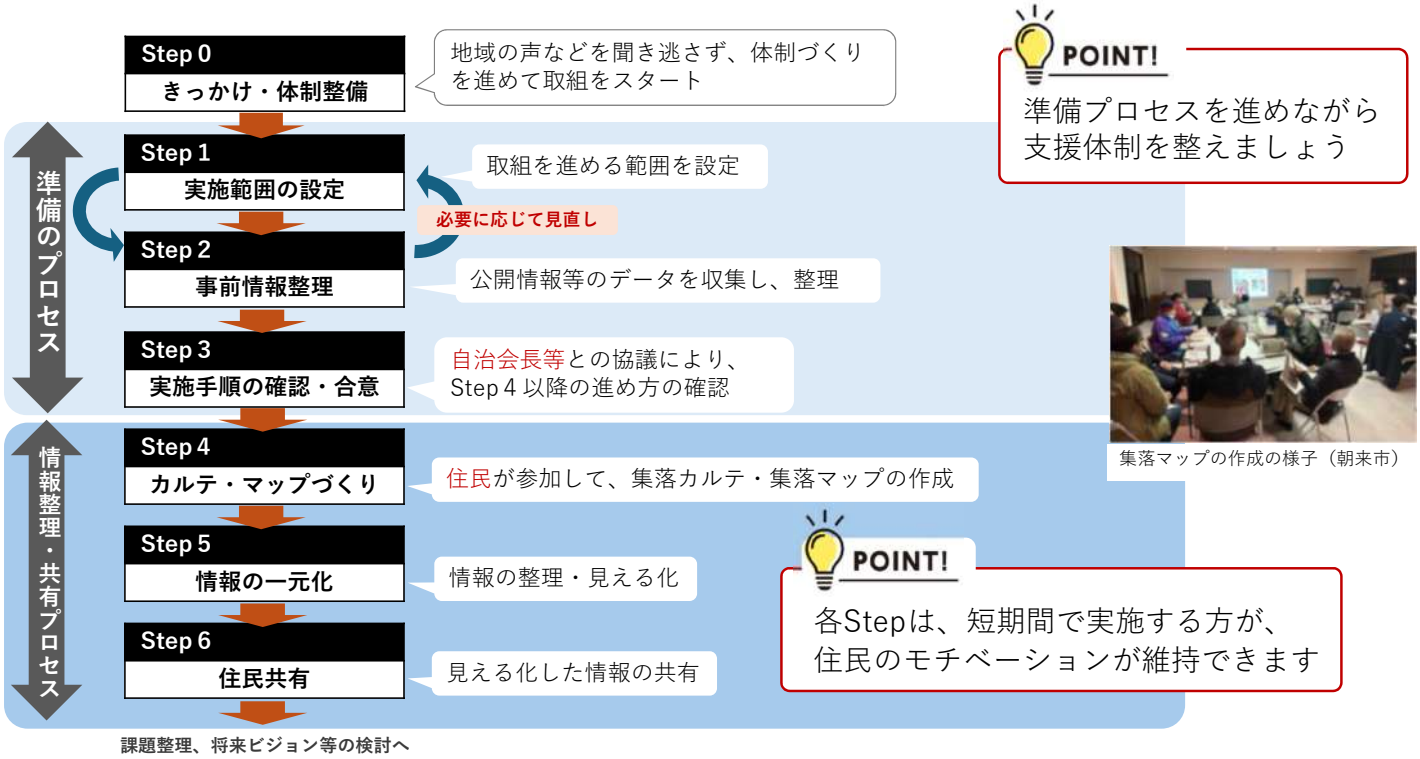
市町・県・アドバイザー等による支援体制の構築・伴走

●市町（庁内）の福祉・農林部署など、集落・地域支援に向けた連携・協議体制づくり（行政として、横断的な集落課題に対応）
●集落・地域づくりに関する支援人材を確保した体制の構築（市町職員に限らず、社協や民生委員、専門的な人材なども含めて検討）

3．サポートツール作成の流れ

ー集落の現状や活動を可視化し、検討のきっかけにー

○サポートツール作成の流れ



Step 0 きっかけ・体制整備

1．「取組のきっかけ」を逃さずに、戦略的な地域づくりに繋げましょう

●きっかけ①：既存の集落・地域支援（地域自治の制度づくり・見直し等）の機会

例：行政としての地域運営組織の創設・見直し実施
　／地域運営組織単位の長期計画の作成や改定
　／集落や地域運営組織の実態調査の実施とその結果周知機会　など

●きっかけ②：集落や地域の個別課題に対応した施策展開の機会

例：「空き家活用」や「移住者獲得」にむけた取組機運
　／「農地の将来像を描く地域計画」などの策定
　／「地区防災計画や災害発生後の復興計画」などの策定
　／「地域の重要施設の利活用」などの検討機会　　など

●きっかけ③：集落や地域からの個別相談対応時

例：相談対応をきっかけに、集落や地域全体の見直し支援に取り組む　など

●きっかけ④：集落の将来（今後）に向けた新たな支援施策・支援制度の検討時

例：集落支援などの施策等の展開時に、地域に声かけする（地域からの手挙げ等を期待）　など

Step 0 きっかけ・体制整備

2．戦略的な地域づくり支援にむけて、市町の方針・事業計画等の設定・確認とともに、支援体制を市町各部署横断的に確認・現場に入る支援者・ファシリテーター等の体制づくりに繋げましょう

●体制整備①：市町における集落・地域支援に向けた部署横断的な連絡・協議体制づくり

集落・地域運営組織担当部署だけでなく、福祉や農林等、集落・地域持続可能性に関連するあらゆる部署が、情報共有・理解した会議体や情報共有体制を構築し、行政として横断的な集落課題に対応できる協議体制を作る。

例：住民自治支援横断連携会議の設置、地区ごとの庁内情報共有会議の開催　など

●体制整備②：集落・地域にサポートツールを活用して支援に入る人材・体制の確保

サポートツールの活用方法を理解し、集落へ実際に入り、取組を推進する支援人材を確保する。新規人材に限らず、市町職員の担当者や関連する事業を担当する職員、社協や地域づくりに関わる民間組織など、幅広い視点で既存の人材や体制を活かす。

例：地域伴走支援者の育成プログラムの実施、支援人材・機関の雇用、
生活支援コーディネーターや集落支援員との連携　など

Step 1 実施範囲の設定

1.「持続可能な地域づくり」を念頭に、取組を進める実施範囲を設定しましょう

●**基本は集落単位で設定**します。

●集落の共同作業の状況や維持機能、地理的要因（周辺集落との距離等）、今後の施策の展開などを踏まえ、**状況によっては複数集落、地域運営組織単位**とします。

●将来的な小規模化・高齢化の進展度合いにより、単一集落では維持が困難な場合は、継続可能となり得る複数集落で検討します（小学校区単位など）。

2.実施範囲は、集落や地域運営組織の代表等に「妥当性」を確認しましょう

●地域・集落の客観的状況だけでなく、集落住民間の関係性、これまでの文化活動の関係性等も重要です。

●集落の長や地域運営組織の事務局、また行政内の関係部署・担当者等にヒアリングや情報収集をし、**政策展開や適切な支援に結び付く実施範囲の可能性を探ります。**

●設定した実施範囲について、関係する住民代表に、将来について考えていく範囲の妥当性について、**「無理がないか」、「実態と乖離しないか（イメージできるか）」について、集落・地域運営組織の代表等へ確認**します。

Step 2 事前情報の整理

1. 実施範囲のデータを収集し、可能な範囲で 【A】集落カルテ を作成しましょう

★把握する項目の詳細は「手引き」を参照

●手順①：把握する項目を設定します

・「サポートツールを活用する目的」を踏まえて、把握する項目を検討し決定します。

・把握する項目をもとに、「集落カルテ」のフォーマットを準備します。

●手順②：「行政が保有している情報」、「統計情報（人口等のデータ）」を収集します

・関係各課から情報を入手します

●手順③：集落・地域運営組織が保有している資料を事前に収集します

・地域でしかわからない情報は、地域に情報提供をお願いしましょう。

・資料で把握できないところは、自治会長等にヒアリングをして把握します。

2.実施範囲のフィールドワークを行いましょう

●集落カルテの情報や、集落のマップをもとに、実施範囲を実際に見て回ります。

●必要に応じて写真等を撮影し、Step 4 （カルテ・地図づくり）などで活用します。

Step 3 実施手順の確認・合意

【A】集落カルテ、【B】集落マップの作成方法を検討し、集落や地域運営組織の代表等の合意を取りましょう

★作成方法の詳細は「手引き」を参照

（決める内容）集落カルテ・集落マップの作成方法、開催日時・場所、主催者
主催者、参加対象者、呼びかける方法、呼びかけたい人など

POINT!

地域の方が「集落の将来像に関心がない」、「地域活動が盛んでない」などの場合は、集落マップ作成を先に行い、地域の方に関心を持ってもらうきっかけづくりが重要です。

逆に、地域の方が「この集落を守りたい」、「何とかしたい」など意識が高い場合は、集落カルテの作成を先に進めるなど、**地域の実情に応じた進め方を検討**してください。

Step 4 カルテ・マップづくり

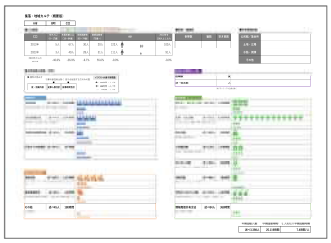
【A】集落カルテ

以下の手順で作成します

①役員等への事前説明
集落の役員等に、カルテの作成目的を丁寧に説明し、理解を得ます

②役員等へのヒアリング
既存資料では把握できない項目は、役員等にヒアリングをして作成します

③概要版の作成
集めた情報は細かい情報も含むため、共同活動の内容を抜き出しが一目でわかるように、概要版（右記）を作成します



④住民ワークショップ
地域の方に集まってもらい、カルテの内容を確認し、必要に応じて、追記・修正します
※「ワークショップ」という言葉は、ツール上の便宜上使用しており、集落に合わせた名称としましょう（例：寄り合い、話し合い、会合など）

⑤役員等への共有
カルテの最終版を役員等に報告・共有します
※集落の方が、自分たちで活用や更新していけることを想定します

Step 4 カルテ・マップづくり

【B】集落マップ

以下の手順で作成します

①役員等への事前説明
集落の役員等に、マップの作成目的を丁寧に説明し、理解を得ます

②グループの設定
地図を作成するグループを設定します
※グループは、組（隣保）単位、自治会単位など、話し合いやすい設定にします

③住民ワークショップ
地域の方に集まってもらい、マップを作成します

集落マップの作成の様子（南あわじ市）

POINT!

集落マップは、「将来地域の共同活動がどうなるか」を可視化するものです。

サポートツールを活用する目的に合わせて「草刈りなどの共同活動」、「共同活動を担う住民の方」、「地域で管理している資産（公民館やお寺など）」などをプロットします。

Step 5 情報の一元化

作成した【A】集落カルテ・【B】集落マップを取りまとめてデータ化し、情報共有ができるよう整理しましょう

【A】集落カルテ

●住民ワークショップでの話し合いの内容を踏まえて、集落カルテ・概要版を見直し、完成させます。

【B】集落マップ

●紙ベースで作成した集落マップを、扱いやすいようにデータ化します。
●貼られたシールの数をカウントし、表やグラフで表現します。　　など

例：徳島大学田口太郎研究室　提供資料から加工引用

Step 6 住民共有

作成した集落カルテ・集落マップを、住民や関係者の方々に見てもらい、意見をもらいましょう

◆住民共有の方法（例）

①既存の地域・集落の会合で報告する

②報告会を実施する

③集落や地域の広告物に内容を掲載する

④新規の紙媒体（ニュース等）を発行する

⑤ウェブサイトやSNSなどを活用する

ニュースのイメージ

例：丹波ひとまち支援機構実施地域で作成されたもの
（原稿は住民作成）

（参考）集落での検証事例

南あわじ市（農村型）
朝来市（旧市街地型）

南あわじ市（農村型）

①南あわじ市におけるツール検証の狙い

- 人口減少・高齢化・世帯の縮小などを背景に、
  「地域の担い手がいなくなる」　⇒　「環境維持が困難になる」、
  「伝統文化・行事の継続が困難になる」
  といった将来への不安の声が、市内の多くの自治会からあがっている。

- 漠然とした不安の声はあるが、具体的な対策や取り組みについての議論は地域も行政も進んでいないのが現状。

- 一方で、現在地域の担い手の主力となっている団塊の世代が今後高齢化し、益々課題が大きくなることが想定される。

地域も行政も対策や取り組みを検討するためにも、**まずは各自治会の現状を把握することが重要。**
その上で・・・今後10年を見据える中で
【行政】 地域が直面するリアルなイメージをもつ
【地域】 地域の仕組み見直しに向けた気づきをもつ　ことに繋がれば

南あわじ市（農村型）

②実施体制（主な作業に携わった人数・かかった時間）

南あわじ市（支援者側）	作業	集落
	集落カルテ	
職員１名（３時間程度） ※次回以降は１時間半程度か？	事前データ入力	総会資料、自治会長引継資料の提供
① 集落からの資料提供がなければ倍くらいかかったかも？ 職員２名（１時間）	ヒアリング	自治会代表者（副会長）　１名 集落支援員　１名
② データ不足が一部あり。カスタマイズに苦戦 職員１名（２時間）	概要版作成	ー
③ 他部署へ依頼。図面の区割りに苦戦	集落マップ	一部住民から「何でこんなことせなあかんの？」という声あり。納得してもらうのに少し苦慮した。
職員２名（３時間）	地図作成	ー
職員４名（４時間）	WS準備	集落での説明等　１時間
④ツールの意味を理解して共有するのに苦戦 職員４名 （冒頭趣旨説明１名・ 全体進行１名・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ2名） 社協職員2名（ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ2名） ｱﾙﾊﾞｯｸ３名 （全体支援１名・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ２名）	WS当日 準備：1時間 本番：1時間40分	３テーブル（３つのエリア） 住民15名

※検証結果を踏まえて、ツールの修正等を行いました

南あわじ市（農村型）

③支援者としてツールを活用した感想

良かったこと	【いい意味で深刻になり過ぎずに・・・】 ・カルテ作成を通して、集落と対話 ・マップ作成を通して、10年後集落の姿がリアルに ・職員が現場でスキルアップ
苦労したこと	・マップの準備（集落を３エリア【隣保】に分割） ・集落への説明【何故この取り組みが必要なのか】 ・全体進行（３テーブルの進捗管理、雰囲気づくり）
活用にあたり工夫したこと	・カルテ作成の効率化（集落へ事前資料提供依頼） ・マップ作成のポイントを絞る（人の変化にスポット）
活用にあたり注意すべき点	・行政支援者との目的、目標共有 ・ワークショップ当日はもとより、次の段階の支援を見据えた外部支援者（地域再生AD）との連携

※検証結果を踏まえて、ツールの修正等を行いました

南あわじ市（農村型）

④活用効果

Q　地域住民の反応は？（取組前と取組後）

A　１０年後を見据えた中で、「動き出さないといけない」とい
機運は集落で生まれつつある。

取組前・・・何でこんなことせなあかんの？
取組後・・・取組には覚悟も必要。集落として取り組むの？

一方で、「では、どこから手をつける？」「次は何をする？」という集落の疑問に答えれていない状況が課題。

Q　支援者（行政側）のねらいが達成できたか

A　「良かったこと」に記載のとおり、**ねらいは一定達成できた。**
【行政】 地域が直面するリアルなイメージをもつ
【地域】 地域の仕組み見直しに向けた気づきをもつ
支援側(行政、社協)の職員にとっても現場経験を
通じて**スキルアップ**が図れた。（**自信も生まれた**）

南あわじ市（農村型）

⑤他市町へのメッセージ

・「自治会統合・隣保再編」「役員体制や活動見直し」
「行政からの依頼事項整理」「地域のあて職整理」
今後１０年で、集落（自治会）から行政に対しての支援要請、要望の声は益々多くなってくると思います。

・いずれにせよ、**各集落の現状や将来の姿を、集落との対話を通じて把握することが重要**となってきます。
今回のツールは、そういった意味で**支援者（行政職員等）が集落とコミュニケーションをとるのに有効**と感じました。

・しかし、現場（集落）での話し合い支援を進めるには、**集落に伴走する外部支援者（地域再生アドバイザーなど）との連携**が重要になってくると感じました。

今後の、ひょうご多自然地域づくりネットワーク会議に期待！！

朝来市（旧市街地型）

①朝来市におけるツール検証の狙い

・朝来市では、来年度「地域コミュニティの在り方懇話会」を設置し、地域コミュニティの在り方について検討する予定にしている。

・懇話会の準備として、今年度小規模集落及び地域自治協議会を対象としたヒアリングを実施し、課題を整理している。

・他方で、小規模集落に限らずまちなかの区が連携して自治を担っている区においても、人口減少等による地域の課題が出てくる可能性がある。

・今後、将来に向けた話し合い、取り組みが必要であるという認識のもと、まちなかの住民の方にも地域の現状と将来を認識し共有していただくため、今回ヒアリングを実施した。

朝来市（旧市街地型）

②実施体制（主な作業に携わった人数・かかった時間）

朝来市（支援者側）	作業	4区
	集落カルテ	
職員1名（1時間程度）職員	事前データ入力	区長4名（数時間～数日）
アルパック1名（7時間） ※区長記入内容の確認	ヒアリング	区長4名
・市職員1名（2時間程度） ・アルパック1名（3時間程度） ※区からの情報量による	概要版作成	ー
	集落マップ	
職員3名（1時間）	地図作成	当該行政区出身の職員に区の境界を確認した。
職員2名（1時間）	WS準備	ー
職員6名 （全体進行等2名・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ4名） ｱﾙﾊﾟｯｸ3名 （全体支援1名・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ2名）	WS当日 （2時間）	住民23名

※検証結果を踏まえて、ツールの修正等を行いました

朝来市（旧市街地型）

③支援者としてツールを活用した感想

良かったこと	・10年後には黄色のシールが多くなり、地区の維持がますます困難になることが視覚的に共有できた ・今回のWSに関わったことにより地域についての理解を深めることができた
苦労したこと	・カルテ概要版の数量を示すイラストの貼り付け作業に時間を要した ・家の枠組みだけが示された地図であったため、誰の家なのかを特定するのに時間がかかった ・アパートの住人の年齢がわからなかった
活用にあたり工夫したこと	・世帯ごとにシールを貼ることで効率が良くなった ・区で作製した地図を持参することにより、地図へのシール貼りをスムーズに進めることができた
活用にあたり注意すべき点	・時間調整や聞き取り方などファシリテーターとしての能力が必要 ・集落の規模が大きくなると作業が大変である ・概要版はパワポではなくエクセルのほうがよい（職場環境）

※検証結果を踏まえて、ツールの修正等を行いました

朝来市（旧市街地型）

④活用効果

○支援者（行政側）のねらいが達成できたか
・住民の方に現状と10年後の状況について考えていただく良い機会となった
・今回のWSに関わったことにより、地域についての理解を深めることができた（地域担当職員）

○地域住民の側の反応
・10年後には黄色のシールが多くなり地区の維持がますます困難になることが視覚的に共有できた
・空き家や空き店舗の状況について、話し合うことができた
・区内の情報を共有する良い機会であったが、その情報をどこまで共有していいものかが曖昧である

朝来市（旧市街地型）

⑤他市町へのメッセージ

【良い点】
・集落の現状等を把握するには良いツール

・WSは住民の方の情報共有や今後のまちづくりに関する意識の醸成には有効

【課題等】
・集落数にもよるが、集落カルテの作成にある程度の時間と労力が必要

・集落カルテ等について、自治体等でどのように活用していくかを研究する必要がある